

ボランティア通信 神奈川中学校

～目次～

生徒と関わり合う中で
英語英文学科 4年 安藤 あかね

生徒の目線に立つこと
英語英文学科 4年 影山 千恵

神奈川中学体験記
人間科学科 3年 緑川 隼

生徒と関わり合う中で

英語英文学科 4年 安藤 あかね

神奈川中学校の個別支援級で、アシスタントティーチャー(以下AT)としてボランティア活動を始めてから約半年が過ぎました。活動当初は学生が一人でしたが、後期からは学生が二人増え、三人で活動ができるようになりました。以前はカンファレンスを他の中学校ATの学生と合同で行っていましたが、11月からは神奈川中学校カンファレンスとして行うことができているのでうれしく思っています。また、合同でカンファレンスを行っていたときは、他の学生は他校での活動のため、その生徒の様子を想像することしかできませんでした。しかし、今では共通して関わっている生徒について話すことができるので、ボランティア活動についてより話しやすくなりました。

私が行っている主な活動は、少し支援をすれば様々な活動がしやすくなるように生徒を支援することです。支援が必要と言っても、その生徒たちは活動について声掛けをすれば理解し、一生懸命取り組みます。私たちが生徒たちに具体的に指示を出すことで、片づけを行うことができたりスムーズに学習に取り組んだりすることができています。以前に、片付けの指示をしなくてもその生徒が一人で片づけをした姿を見たときは、驚いたとともに、に感動しました。ボランティア開始当初、その生徒とは、コミュニケーションをとることに戸惑う部分もありま

したが、今では、だんだんと本人の意思が分かるようになってきた気がします。また、こちらの支援が生徒の行動を制限してしまわないように、生徒と行動するときは、生徒が主体で行動できるように気を付けなければならぬと思いました。

ボランティア活動日は、当日の生徒の様子はもちろん、生徒が以前に比べてどう変化しているか、些細なことでも見つけられるように生徒と接するようにしています。生徒たちは、以前より先生方の指示を素直に聞ける回数が増えたり、困っている時に助けを求められる回数が増えたり、社会に出るうえで必要な力が身につけてきたと感じています。この半年で私が見つけたのは少しかもしれませんが、間近で生徒の成長を見られたのはとても貴重だと思います。また、活動日には来ている生徒全員と会話するようにしており、各生徒と関わる時間をできるだけ多く取れるようにしています。生徒個人の具体的な障がいについては分かってはいませんが、生徒と積極的にふれあうことで、生徒への関わり方について学ぶことができているのではないかと感じています。

残り数か月のATの活動ですが、これまで以上に生徒と関わることを意識し、接し方や、先生方の動き等についても学べるように活動していきたいと思っています。

生徒の目線に立つこと

英語英文学科 4年 影山 千恵

私は今年の後期から、神奈川中学校のアシスタントティーチャーとしてボランティア活動を始めました。個別支援級の生徒の学習の支援をしたり、生徒と一緒に活動に参加したりしています。後期から始めて、6回ほど活動をしました。個別支援級に行ったことが、これまでなかったので、最初はどのように生徒に接すればいいのが悩むことが多かったです。

個別支援級では、教室が3つに分かれていて、数学や国語の時間に生徒の特性別にクラスが振り分けられています。私は、1番支援が必要なクラスに行くことが多いです。ある国語の授業の時に、私は女子生徒について漢字練習を行いました。「数学」、「神奈川中学校」、「港北区」など生徒に身近な言葉であり、かつ小学2年生レベルの漢字の練習でした。女子生徒はお手本通りに書くのに苦労していて、何度も「わからない」と言って、書きたがりませんでした。一緒にやろうと声をかけ、漢字を書くときのポイントを言いながら進めようと思いました。「数学」の「数」を書くときに私は「米」と「女」と「父」を合体するのだよ、と言ったのですが、生徒は「わかんない。書けない。」と言い続けました。結局その時は、私が朱字でお手本を書き、その上から生徒がなぞって漢字を書きました。

「数」を「米」「女」「父」で分けるつもりで書くとき書きやすいというのは私の感覚です。私の感覚で彼女に言ってしまったため、彼女にとって理解するのが難しかったようです。個別支援級の生徒に漢字がどう映っているのかわかりませんが、少なくとも自分の感覚を彼女らに押し当てるのは、難しいことだと思いました。私と見え方が違うのは当然漢字だけでは無いと思います。生徒に何かを教えるとき、普段話すときも、自分の当たり前を生徒たちに押し当てないように注意する必要があることに気づきました。

活動を始めたばかりの頃には、生徒たちのできること、できないことの判断がわからないので、私は何でもかんでも手助けをしてしまっていました。しかし、担当の先生に「生徒にやらせてください。」と注意され、自分が良かれと思ってしていたことが、生徒のできることの幅を狭めてしまっていたことに気が付きました。注意をうけてから、私は必要以上に生徒に手を貸さないように心がけています。手を貸さないようにしながらも、目の前の生徒が制服のボタンを閉じるのに苦労していたり、授業中に黒板に書いてある漢字をプリントに写すのにつまづいていたりする姿を見ると、「今、手助けするべきなのか。時間がかかれば、生徒にできることなのか。」と、考えてしまいます。生徒によってもできることの幅は異なります。まだ、それを見極めることができていないので、毎回の活動で生徒をよく観察し、把握したいと思っています。

私は4年の後期からアシスタントティーチャーを始めたため、生徒と接せられる時間はあまり長くありません。毎回の活動で悩むことも多くありますが、それ以上に生徒と過ごす1日はとても充実して、楽しいです。短い期間ですが、個別支援級でのボランティア活動では多くのことを学ぶことができ、活動を始めて良かったと思っています。これからも、毎回の活動を全力で取り組み、生徒たちとの距離を縮めていきたいと思っています。

神奈川中学体験記

人間科学部 3年 緑川 隼

私はATのボランティアを今年度後期から始めました。神奈川中学校の個別支援学級がどのような場なのか心配でした。しかし、心配とは裏腹に、素直で人懐っこい生徒ばかりだったので、楽しく活動を行うことができています。

このボランティアを通じて学んだことは、「笑顔の重要性」と「わかりやすく伝える力」です。私は毎週月曜日に参加しているので、特に感じることもなのですが、生徒は週の初めはどうしても気分が重くなっていたり、やる気が出なかったりしているように感じます。それもあって教室内の空気がとても重く感じるのですが、教室に入るときに笑顔で挨拶をすると、生徒も笑顔で返してくれます。挨拶を全員と行うことで、教室内の雰囲気ガラッと変わり、週の初めから生徒が、意欲的に学校生活を送ることができるとに気が付きました。これは個別級の生徒に限ったことではなく、普通級の生徒も同じです。笑顔で接することで、生徒も心を開いてくれるきっかけになったり、そこからさまざまな情報を得ることができたり、相談相手になることができました。コミュニケーションをとるための手段として「笑顔」は、必要な能力であると実感できました。

また、「伝える力」についてです。数学や英語があまり得意ではない生徒に、「教えてください」と自習の時間言われたことがありました。最初は普通級の生徒なら、理解できるレベルで伝えてみたのですが、あまりピンとこない様子で、考え方を2段階に分けて伝えてみました。しかしそれでもしっくりきた様子がなく、理解には程遠いと感じました。そこで考えたのは、興味の引きそうなものに例えて数学の問題を置き換えたり、英語の会話をゆっくり丁寧に教えたりすることを心がけるようにしました。そして、課題に関して段階をおって徐々に詰めていくことで、つまづいていた問題を解決することができ、その後の問題もスムーズに解くことができました。このことから、生徒にとって一番理解ができる方法が、解決の手順は細かくわかりやすく、相手の視点に立ち、言い方にも配慮する、ということなのだ、と思いました。

また、生徒が課題と向き合うために、休憩ポイントを作り、作業内容も小分けにして行うようにしてみました。少しずつ課題を終わるようにすると、ゴールが明確化しているので、やりやすいのではないかと感じました。

まだまだ発見できること・交流を深めることで見えてくる一面などがたくさんありそうなので、もっと生徒とかわかってみたいと思いました。

発行日：2017年1月20日

発行場所：神大ユース・サポート・プロジェクト (JYSP)

TEL：045-481-5661(内線4352)

FAX：045-413-4154

E-mail：jysp-jimukyoku@kanagawa-u.ac.jp

学校ボランティア通信

～川崎市立中学校～



☆目次☆
生徒のことを思って？
人間科学科 4年
小林 祐子
☆川崎市立東高津中学校☆
教育サポーターを経験して
人間科学科 2年
千明 貴子
☆川崎市立犬蔵中学校☆
自分を認めることの大切さ
英語英文学科 4年
増尾 香織
☆川崎市立京町中学校☆
川崎で学んだこと
経済学科 2年
中川 裕樹
☆川崎市立田島中学校☆
全員に目を向けること
法律学科 4年
中島 渚
☆川崎市立西高津中学校☆
☆川崎市立東高津中学校☆



生徒のことを思って？

人間科学科 4年 小林 祐子

川崎市の中学校で教育サポーターを始めて半年が経ちました。教育サポーターとは、特別な支援が必要な生徒や学習につまずいている生徒の学習面や生活面でのサポートをすることです。私は週に一日サポーターに行っています。そのため、生徒とともにお弁当の時間や昼休み、放課後の部活動等の時間を過ごすことができ、教員としての楽しさをより感じることができます。また、授業だけでなくテスト期間や新入生見学会の学校行事にも携わることができ、生徒や先生方からたくさんのことを学んでいます。

私は、今期は生徒との距離を縮める努力をしました。そう思うきっかけになった出来事があります。それは体育の授業の際、ある男子生徒に「俺らはいいいから先生は女子のところ見ていて」と言われたことです。生徒のことを思っているというアドバイスをしていたつもりですが、それが生徒にとっては自分を否定されているようで嫌な気分にならせていたようです。教科担当の先生に相談したところ、生徒を褒めることを勧められました。ほんの小さなことでも、できたことに対して評価し成功体験を重ねる事で生徒のやる気も上がってくるのだとアドバイスを受けました。また、大学生のボランティアという立場から「先生」というよりも、「お姉さん」のような関わり方をすると良いとも言われました。それからなるべく細かいことを指摘せず、注意するよりもできたことを褒めたり、一緒に喜んだりするよう心がけています。そうした方が、生徒も自分から声をかけてきてくれたり、素直に話を聞いてくれたりします。最近では、生徒の学習カードに私のアドバイスがわかりやすかったと書いてあったそうです。少しずつ私の存在が生徒に意識されるようになり、受け入れてもらっている感じがして嬉しく思います。一方、生徒と友達感覚になってしまうことがあるので、しっかり立場をわきまえて生徒の学習や生活のサポートをしていきたいと思っています。

教育サポーターや学習支援を通して、生徒の学力、サポートの仕方、日常生活の関わり方など学んでいます。来年からは教壇に立って教員として生徒と関わっていきたいと思っていますので、残り数ヶ月ではありますがもっと学校現場を知っていきたいです。2月には自然教室の指導員として参加する予定です。そこでは校舎を離れた環境での生徒の様子や先生方の動きも学んできたいです。

教育サポーターを経験して

人間科学科 2年 千明 貴子

後期の教育サポーター活動を通じて、生徒との関係性、対教職員との関係性が大きく変化した。まず、生徒とは、心の距離が少し近づいた。以前は挨拶する程度の関係であったが、毎週決まった同じクラスに入るようになってきたので、生徒も私のことを覚えてくれ、お互いをきちんと認識した状態で挨拶し合えるようになった。また取り出し授業で個人的に関わり合う生徒とは、お互いのプライベートな話までできるようになってきたので、本当によかったと思う。

しかし、一部生徒とは距離感が掴めず、ちょっとした事件（生徒の行為による打撲）も起きてしまった。既に和解しているので現在は何も問題はないが、その場ですぐに私が他の先生に助けを求めればよかったのに、少し耐えてしまったせいで大事に至ってしまった。こうしたことは、どういうタイミングで起こるか予測できないものなので、生徒との問題で抱えきれなくなったら早めに他の先生に相談する事が大事だと身をもって学んだ。

そして、教職員との距離についてだが、こちらも以前より縮まった。以前は教職員の構成や担当を掴めていなかったもので、誰に何を聞けばよいか全く判断できず誰へも積極的に話しかけていくことができなかった。しかし、先生方の配慮により様々な教科で様々なクラスに入ることができたため、少しずついろいろな先生と話す機会ができ、誰に何を聞けばいいかを把握することができるようになった。そのおかげで困ったことは比較的早い段階で相談できるようになってきたと感じる。また、先生方の授業を拝見させていただくことで、生徒の中の学力差があっても全員が真剣に聞く授業をいかにして作っていくかを学ぶことができたので、とても勉強になった。

今年度のサポーターとしてかかわることができた期間が残り4か月となったが、今後の課題として、生徒にとってもっと身近な存在になれるよう、生徒ともっと話していくように心掛けていきたい。親切の押し売りのような声掛けを行うのではなく、生徒が話しやすいように、声をかけてほしいような生徒や、何か課題を行っている際に困っている生徒を見逃さずにすぐ頼れる場所で見守り、必要であればこちらから声を掛けをしていくという姿勢で臨みたいと思う。そのような気持ちをうまく表現できれば、生徒にこの人になら少しプライベートなことも話せそうと思ってもらえるのではないかと考えたからである。

私の担当させていただいている中学校には様々な事情を抱えた生徒がたくさんいる。そういった生徒たちが、少しでも学校で楽しいと思えるような時間を作っていけたらという大きな目標を掲げ、頑張っていきたいと思う。



自分を認めることの大切さ

英語英文学科 4年 増尾 香織

教育サポーターの活動は、自分を見つめなおす機会をたくさん与えてくれます。実際の現場で、先生方が行っている授業や部活動、学級運営、行事の運営などを目の前で見てみると、学ぶことがたくさんあります。また、先生方だけではなく、生徒たちからも学ぶことがたくさんありました。普段は、元気いっぱい部活動や行事に参加したり、必死に勉強している姿を目にしますが、若い力を発揮するときは、私が思っている以上の力を見せてくれます。しかし、何も準備をしないのでできる人なんていません。生徒たちは、彼らなりに努力をした結果が、大きな力となって見えてくるのだとわかりました。そして、彼らは彼らなりにどのように頑張ったか、どのように努力を積み上げてきたかわかっています。その上で、自分自身で認めてあげているということがわかりました。

今年度の初め、学年が変わり先輩になった上に、部活動や勉強も忙しくなり、生徒たちは少し大変そうに毎日の学校生活を送っていました。しかし、勉強も部活動も頑張りたい、先輩になって後輩もできたので、ちゃんと引っ張っていききたい、行事も成功させたいと生徒たちの表情から読み取ることができました。しかしながら、現実はその甘くなく、日を追うごとに段々と生徒たちの顔が暗くなっていくのがわかりました。そんな時、ある生徒がクラスのみんなに声をかけたのです。「大変なのはみんな一緒だし、俺たち今まで頑張ってきたじゃん。体育祭の練習の中、部活にも全力を尽くしたし、これからある中間テストに

向けても今勉強を頑張っているじゃん。後輩たちを引っ張ってこうと、声を上げているじゃん。みんなと一緒に頑張っているじゃん。ちゃんと今まで努力し続けてきたじゃん。そんな自分たちを認めてあげよう。」と。この言葉をきっかけに、このクラスは、息を吹き返したようにいつもの明るいクラスへと戻っていき、生徒たちの元気な表情を見ることができました。体育祭も成功し、その後の中間テストもみんな良くできて、夏の大会に向けてさらに力をいれて部活動に取り組んでいました。

いくら自分が忙しかったり、追い詰められている状況だとしても、頑張っているのは自分だけではなくてみんなが努力している。そんな環境は、子供であっても大人であっても変わらないんだと気づかされました。それまでの自分の努力を認めてあげることが大切であり、今の現状をしっかりとして受け止めて前に進むことが大事だと感じました。そして、教師になったときに、自分だけでいっぱいにならず、周りもしっかりと見えるように自分自身を認めていき、生徒たちが若い力を発揮できるような環境づくりをしていきたいなと思いました。



川崎で学んだこと

経済学科 2年 中川 裕樹

私は中学校でのサポートは、10月ごろから始めましたが、生徒への学習支援は、今年度の前期から行っておりました。そこでは、毎週火・木に経済的理由・家庭的な理由などによって自宅や学習塾に通うことが困難な生徒へ学習する場所を提供し、原則として1対1で学習支援をする活動が行われています。原則的に学習者である生徒が自ら持って来て答えや解き方、考え方が解らなかったことを、我々サポーターが教えたりヒントを与えたりしています。その中で生徒を通じて感じて来たものは、サポーターが全て答えを理解していて、それを的確に解説、説明することも重要ではあるが、それ以上に答えが解らないものや説明が難しいものがあつた時に、サポーター自らが、一緒に答えを考え導き出す

ことこそが大切なのではないかということだった。

また、後期からは、放課後の学習支援活動だけではなく、毎週木曜日に中学校で生徒をサポートする活動も始めました。それはそれまで友人から聞いていた、寝ている生徒を起こすことや、後ろから見学したり机間指導をするような支援をすることはありませんでした。私は特別支援級へ行き支援やサポートをさせていただくことになりました。私は、親クラスへ行かない生徒の社会の授業を担当させていただくことになりました。特別支援級での私と生徒との1対1の授業であり、私が実践したいと思っていた、最近よく耳にする班活動を通じてのアクティブラーニングをする機会はありませんでした。しかし、教科書の写真や絵を使って、生徒自身になるべく自分で考えられるような授業になるように工夫をしました。その中で私が感じたことは、当然のことだと思うが、生徒の考える視点と教師の考えでは大きな開きがあるということでした。江戸時代幕末の街の様子を描いた歌川貞秀の神名川横浜新開港図を見せた時にも、ある生徒は、地名が書いてあるものを見て「なんで建物に札が張ってあるのだろう」となどと質問してきました。教科書としては、本来意図したところではないところに生徒は興味をもち、そこから多くの想像を広げていくことを生徒を通じて感じました。何よりも私が特別支援級へ行って生徒から感じたことは、特別支援級の生徒もいろいろな疑問や思いを持っていて、場合によっては、他の生徒とは違った優れた才能や能力を持っているということでした。そして、他のクラスの生徒と比べて、大人の行動を真似することが得意で、教師が行う発言・行動をすぐ真似しようとするために、私も一つ一つの行動や発言、特に言葉使いに注意しなければならぬことなども生徒から学びました。



全員に目を向けること

法律学科 4年 中島 渚

川崎市立西高津中学校の特別支援学級にて活動を始めてから、半年以上が経ち、集中が続かない生徒、騒いでいる生徒など、目の前の状況への対応に精一杯であった状況から少しずつ、その時のほかの生徒の様子や、先生方の動きなどにも気を付けることができるようになった。そんな中で、1つ気が付いたことがある。注意の必要な生徒がいるとき、その生徒を指導するだけではなく、時には周りの生徒たちを褒めていくことだ。

学級の中には、集中が長く続かず離席してしまったり、教室にあるもので遊びはじめてしまったりする生徒がいる。そんなとき、どうしても先生はそこに目を向け、手や時間をその生徒にかける必要がある。時には周りの生徒にも協力を仰ぐこともある。そんな時、先生方は周りの生徒がどんな気持ちであるかを考えることを大切にしていると言う。本当は自分だって遊びたいかもしれない。でも頑張っている。それはもしかしたら、頑張って認めてもらいたいからかもしれない。本当に素敵な先生方だと思う。確かに頑張っているときに、他の生徒がふざけていて、先生がその生徒ばかりに注目していたら、しかたないとはわかっていても、先生は自分のことは見てくれないのかと考えてしまうと思うからだ。

さらに先生方のように、席について学習に取り組むという決まりを守っている生徒を認めて褒めるということは、頑張っている生徒を認めるだけではなく、注意されている生徒にとっても自分がどうすればいいのか考えて行動することのきっかけになるかもしれない。してはいけないことをしっかりと否定しておくことも大切

であるが、「うろうろ立ち歩きちゃだめ」のような「～してはだめ」というような否定的な形よりも、生徒が「自分も座ってもう少し頑張ろう」と肯定的に捉えられるような指導のしかたも大切であると考える。

特別支援学級に限らず、通常の学級でも、学習面においても生活面においても、どうしても問題のあるところばかりに目が行ってしまいがちになってしまう。きっとテストの点数ひとつとってみてもそういえるだろう。いつも頑張っている生徒を見落としてしまいそうである。どんな生徒にも頑張っていることがある。目の前の事態への対応も大切だが、それに追われてしまいほかの生徒を埋もれさせないように、広い視野を持って目を向けられるようになりたい。



発行日：2017年1月20日

発行場所：神大ユース・サポート・プロジェクト (JYSP)

TEL：045-481-5661 (内線4352)

FAX：045-413-4154

E-mail：jysp-jimukyoku@kanagawa-u.ac.jp

戸塚高校定時制 AT

目次

学びなおしと4年間

自治行政学科 4年 栗田 佳苗

一年間のボランティア活動を振り返って

国際文化交流学科 2年 小山内 まいな

学びなおしと4年間

自治行政学科 4年 栗田 佳苗

私は戸塚高校の定時制で「学びなおし」という授業で活動させていただいている。「学びなおし」という授業は、戸塚高校定時制の独自の授業である。一年生と二年生がクラスごとに受けている。小学校高学年から中学校までの内容の国語、数学、英語の三教科をプリントで進めていく授業である。生徒一人ひとりが自分のペースで進めることができ、復習しながら学習をすることができる。私たち学生は生徒のわからないところと一緒に解いたり、解くためのヒントを出したり、出来上がったプリントの添削をして、間違ったところは一緒に解き直したり、なぜ間違ったのかを考えたりしている。

今年活動をしていて、私は初めて「答えは教えてくれないの？」と言われた。私の説明がわかりにくかったのかもしれないと感じたが、私はその時「答えは教えてあげられないな。でも正解だったら”あってる”というよ。」と答えた。すると、「教えてくれる人もいるのに。」と言われた。生徒が考えることがメインの授業では、どこまで教えていいのかは以前から課題としてあったが、私が生徒に答えた言葉が正しかったのかはわからなかった。ただ、私は最初から答えを教えてしまうのは、違うの

ではないか。解きかたでつまずいていて、答えが出せない時に答えを教えてこうするにはどう解いたらいいのだろうかと考えさせることや、途中式などでの九九を覚え間違いをしているなどの時には、九九のみ答えを教えてあげることはいいのではないかと考えている。これは、私も教える側となってから気がついたことである。最初から与えられるよりも自分で模索し掴んだものの方が、与えられたものよりもずっと自分にとって価値のあるもので、自分に残り続けることを最近になってひしひしと感じている。これを学生の立場で生徒に伝えるのは難しいが、いつか私が教員としてクラスを持った時にはしっかりと伝えたいと感じた。それとは別に、説明の仕方や分かりやすさは私の努力が必要であるため、今後も工夫をしつつ頑張りたい。

私は大学1年生の頃から、戸塚高校定時制で活動をしていたが、以前活動をしていたクラスの子たちが廊下で会うと「久しぶり」とか「こんにちは」と声をかけてくれる。その中でも、少し仲が良くなり世間話もするようになった生徒に会った時「俺らあの時うるさかったよね、ごめん、もうすぐ卒業するんだ。先生も頑張ってたね。」と言われてとても嬉しかった。ここまで続けてきてよかったと感じた瞬間であった。



一年間のボランティア活動を振り返って

国際文化交流学科 2年 小山内 まりな

私は今年度から戸塚高校の定時制で「学びなおし」という授業のボランティアをはじめました。この活動を通じて特に学んだのは生徒との信頼関係の重要性です。

「学びなおし」の授業は自習形式のため、答え合わせの時以外は生徒から話しかけられるということはありません。

このような形式の中で、ボランティアを始めたばかりの頃は生徒との信頼関係を重要視していなかったため、自ら話しかけることも少なく、ただ答え合わせをするだけといった形をとっていました。しかし、ボランティアを続けていく中で生徒が理解していないかもしれないと感じる部分や、授業の受け方について教えたり注意したりしなければ、と感じる場面が多くなりました。しかし、今まで必要以上に話しかけてこなかった私は生徒にどのように話しかけたらいいのか、また、何がわからないのかということを理解することが難しく感じました。生徒達も私に質問するよりも、普段からなじみのある先生に質問をしていたので、私に教えてもらおうということが難しいと感じているように思いました。

しかし、ボランティアを続け、自分にとって意味のあるものにするためには、この状況を改善しなければならぬと思いました。生徒に心を開いてもらい、意味のある時間を自分も生徒も過ごすためには信頼関係が必要だと感じたのです。

その工夫として、生徒に話しかけられる以上に自分から話しかけるようにしたり、答え合わせの際には、理解できていないと感じるところを教えてあげて生徒の理解を広げられるようにしたりしました。すると、生徒達から話しかけられる機会も、生徒からの質問も増えてきて、授業が以前より良い雰囲気になっていると感じるようになりました。信頼関係が以前に比べて深まったと今は感じています。

しかし、信頼され始めているからこそ、生徒との対話に以前より一層気を付けるようになった部分もあります。生徒が私に話したいことと、先生に話したいことは違うと考えられるし、先生方のように信頼されていない私が生徒に注意をすることで、生徒が余計な反発心も持つかもしれない、と思うよう

になりました。今回の経験を踏まえて、自分が教員になった際は、生徒に信頼される様な関係を築いてければと思います。



発行日：2017年1月20日

発行場所：神大ユース・サポート・プロジェクト(JYSP)

TEL：045-481-5661(内線4352)

FAX：045-413-4154

E-mail：jyssp-jimukyoku@kanagawa-u.ac.jp

ボランティア通信 ～外国語活動～



児童を理解した授業の工夫

英語英文学科 3年 末廣 帆乃佳

目次

神橋小学校 「児童を理解した授業の工夫」 英語英文学科 3年 末廣 帆乃佳
「生徒の反応を大切にする」 英語英文学科 3年 山下 晴菜
齋藤分小学校 「ボランティアから活かすこと」 英語英文学科 3年 市川 隆紀
「自信をもって楽しめる外国語活動を目指して」 英語英文学科 4年 原田 亜矢子
「児童と生徒の反応の違い」 英語英文学科 4年 藤木 仁美

私は神橋小学校に、昨年度の4月から外国語活動のサポーターとして週1回、また今年度の4月からはアシスタントティーチャー（AT）としても週1回、お世話になっています。たくさんの先生方や、様々な学級、児童にかかわることができ、日々学ぶことが絶えない良い活動となっています。

今学期、特に印象的だったことは、先生方の児童を理解した授業づくりの力です。児童の求めている面白い授業づくりへの工夫、どのような指示をだすと活動がスムーズにできるか、何を優先して教えるべきかの判断など、児童をしっかり理解しているからこそ、行うことのできる授業だと感じる場面がたくさんありました。

そう感じた場面の一つは、1年生の外国語活動のサポートに入り、授業の活動の一つとして、動物のカルタを英語で行ったときのことです。私は、カルタは1年生でも比較的慣れている活動であると思い、簡単に行うことができるだろうと考えていたのですが、そう簡単には行きませんでした。どうやら1年生にとっては説明が難しかったようで、はじめは上手く進めることができなかったのです。その様子を見て、わかりやすいルールを作ったり、デモンストレーションをもう一度行ったりという工夫を瞬時に行っていました。児童は何を必要としているのか瞬時に見極めて、与えることができると、授業を充実したものにするのだと感じました。あらかじめ児童を想定した授業づくりも大切ですが、実際にやってみてその時の児童を見ながら、臨機応変に対応していく力も大切だと改めて感じました。

もう一つの場面は、3年生の外国語活動のサポートに入り、時刻のカルタゲームを行っていた時のことです。私が読んだ時刻をリピートし、「Go!」といった時の札を取るというゲームでした。カルタはただ普通に読んでいても盛り上がる活動ですが、以前4年生で行った時に、担任の先生に「すでにとった札でGo!って言うてみて」とアドバイスをもらいました。実際にやってみるとよりしっかりと英語を聞くようになった経験があったので、3年生の授業でも間違えやすく似ている時刻でひっかけたり、児童が苦手とするものでひっかけたりなど勉強につながるように工夫をしました。すると、児童のふりかえりカードに、「ゲームのなかでelevenとtwelveがわかるようになった。」というコメントを書いている子も見受けられて、良かったと感じることができました。このように、児童がどうやったら授業を楽しむことができ、どんな説明だと活動に積極的になれる、また、どのようなルールを与えると活動がスムーズになるのかなどを丁寧に考えた指導をしていきたいです。そして、児童を理解するという力を付けられるように、これからのボランティア活動も努力していきたいと思います。

生徒の反応を大切にする 英語英文学科 3年 山下 晴菜

5月頃から県立岸根高校で週に一度、1学年の英語の授業のATをしている。1学年は5クラスに分かれていて、私はそのうち2クラスに入っている。クラスごとに雰囲気はかなり異なると感じる。1つ目のクラスは、とても元気がよくこちらが指名せずとも生徒が自発的に発言することが多い。そのためどのようなことに興味があるのか、どんなことを知っているのかわかりやすい。例えば、バイオディーゼルに関する導入で「植物性のとはどのようなものでしょう?」という質問をした。少し難しい問題かもしれないと思っていたが、トウモロコシ油・ゴマ油など身近なものについては答える生徒が多かった。ゴミを燃料にして走る車としてデロリアンと答えた生徒もいた。ノルウェーなどではゴミをエネルギーに変えているのでこの生徒の発想も面白いと思った。映画などで登場するものから教科書の内容につなげると生徒も興味を向けやすいのだと気づいた。もう一方のクラスの生徒は、落ち着いていて話をじっくり聞いていることが多い。指名して答えを求めると授業の進みが早いと感じる。文化に関する問題よりも、文法の問題のほうが得意な様子である。問題プリントも渡してもほとんどの生徒がすぐに解き終わる。このようにクラスによって雰囲気や得意なことが異なることがわかる。もちろん、生徒ごとに違うと思うが、クラス全体の特徴をつかんでおくことも大切だと思った。

一つ気になった点は自己表現の問題では、なかなか書き進められない生徒が多いことである。先日、使役動詞を使って文を自作してみようという活動を行った。その時に生徒に言われたことが、「何を書けばいいかわからない」ということだった。文法が解らないというよりも内容が思いつかないという。例文を載せていたのでそれを参考にしよう指示したが、それでも書けない生徒が多かった。この原因として普段はこのような文の内容を自分で考える活動をしていないためではないかと考えた。もっと簡単な文法を使って短い文を作る練習をしておかなければならないのだと感じた。

また、先生の授業を見ていて生徒に考える時間を与えることがとても重要だと思った。例えば、sheとseeの発音の違いがわかるか聞くと、生徒は二つの単語を言い比べたり、周りや相談したりといった反応を示した。生徒が自分で考える間を置いてから、先生は音声記号と一緒にその違いを説明した。そして生徒たちは説明後にもう一度言い比べをして納得していた。加えて音声記号も教えることで、ほかの単語でもこの違いを示しやすくしているのだとわかった。この説明の後にRussiaはsheと同じ発音をすると教えていたが、生徒は正しく発音できるようになっていた。こうして生徒の反応を十分に待つことで、体験的にも違いを理解する余裕を作れるのだと思った。

ボランティアから活かすこと 英語英文学科 3年 市川 隆紀

後期になってから、児童との関係も前期より親しくなり、さらに英語を使った授業を行えるようになってきた。後期初めての授業の時も、児童たちが温かく迎えてくれて、私自身も楽しんで外国語活動に参加していくことができた。

私は斎藤分小学校では5、6年生の授業を担当しているのだが、どちらの学年も外国語活動に非常に積極的であると感じている。特に5年生は、授業の最初のGreetingにおいても、笑顔で元気で返してくれる。いつも行なっていないが、児童が知っているであろう疑問文を提示しても、抵抗なく返してくれる。例えば、雪が降っていた日にいきなり、「Do you like snow?」と聞いても、「Yes!」と笑顔で返してくれて、一気に英語授業の雰囲気を作ることができた。英語を使ってやり取りすることに臆していないと感じている。6年生も知的欲求が高まってきたおかげで、授業中友達と会話をするときも、知っている英語を使用したり、こちらが示す英語を自ら真似して言うなど、英語を使ったやり取りを覚えていきたい、使っていきたいという探求心が増してきていると感じている。

また、前期同様、実際の教育現場で教員という立場で授業を行なっているということに、非常にやりがいを感じている。高校で教えるためには、小学校・中学校との連携が大事であると感じている。小学校・中学校でどのような授業をしているか、文部科学省のホームページで調べたり、知り合いの教員などに聞けば表面上は理解できる。だが実際に、生徒の反応や理解度、活動の充実度など、目で見て体で体験していることでわかることも多くある。そのような体験をしているだけでも、高校での授業づくりに役立てていけるものがあると考えている。現在は活動型の外国語活動にしか関わっていないが、英語が嫌いという生徒は思っていたよりも少ないのだと感じている。

いい教員であるためには、いい授業をするだけではない。大きな引き出しを持っていることも不可欠だと考えている。それも上で書いたように、表面上だけでなく、内面的な情報を得られるからである。教員自身が体験していれば、生徒に対する説得力も強くなる。この先生は物知りだなと思われるだけでも、生徒からの信頼度は変わってくるし、いい対人関係を築いていけると考えている。実際の教員現場を経て、教員になれるということに誇りを持てるようになった。

自信をもって楽しめる外国語活動を目指して 英語英文学科 4年 原田 亜矢子

前期に引き続いて、斎藤分小学校で外国語活動のアシスタントティーチャーとして活動させていただいている。活動を通して、学級担任の積極的な授業参加の機会が多くなっているように感じた。45分間ALTの先生が英語で話し続ける授業は、児童にとっていつもとは違う環境になり、どのクラスも少々緊張している様子が見受けられる。しかし、活動のモデルを学級担任と共に示すことによって、教室全体の雰囲気がふっと和らぐようである。授業のすべてを英語で行うことだけに偏ると、英語を専門としない担任は後ろに下がりがちである。しかし、児童と共に学ぶ「学習者」のモデルとして積極的な授業の参加が望まれる。活動のデモンストレーションを、ALT、サポーター、担任で行う。担任が英語の苦手な方であっても、児童にとっては、英語の苦手な担任が活動に参加しようとする姿が励みになるのである。また、担任の日本語によるつぶやきが、さりげない学習の支援になっていることに気が付いた。私は同小学校で、2週間の教育実習でもお世話になった。その際に英語の授業に担任として参加したが、その時の雰囲気はあまりよくないものだった。それは、児童に活動の様子を聞いたり、声掛けを行ったりしたもの、担任としての外国語活動での役割を果たせていなかったからだと考える。実習後、担任の先生方の様子を見ると、「今ALTの先生が言ったのは～ってことかな?」「やってみよう!」とさりげなく声をかけ、理解の支援を行っていることに気が付いた。日本語でそのように後押しされると、児童にとっては自信をもって活動に取り組むことができるだろう。

このようなことから、小学校の外国語活動では、ALT、AT、学級担任それぞれの役割を明確にして臨むことが必要だと考える。私は、ATとして、活動の補助をなるべく英語を使って行いながら、1人でも多くの児童が楽しく外国語活動の時間を終わられるように支援を行っていきたい。児童にとって、日本語ではなく、「英語で理解し、活動に参加できたこと」は、外国語活動の中でも大きな自信になると思う。したがって、児童とのコミュニケーションはなるべく英語で接したい。そのためには、児童の積極的な姿勢を見つけ、さらに自信をもって活動に取り組めるように声をかけたい。



児童と生徒の反応の違い 英語英文学科 4年 藤木 仁美

私は斎藤文小学校での外国語活動のサポーターは2年目で、今年は5年生と3年生、特別支援級を担当しています。その他にも3校の中学校で学習支援等のボランティアを行っています。中学生との違いが様々な場面で見受けられ、とても興味深いです。

斎藤分小学校のALTは複数の小学校を掛け持ちしていて、準備がかなり大変そうですが、その分、他の小学校で試したものを児童の反応を見ながら念入りに授業改善をされていて、児童はみなとても楽しそうに授業に参加しています。学校によっても反応が違うようで、それぞれの児童に合った授業を作るのは簡単なことではないですが、笑顔いっぱい活発に活動してくれた時はALTやサポーターの私たちも幸せな気持ちになります。

その入念な準備があるからこそ、生徒も楽しみながら学習できるのだと感じています。しかし、念入りに準備したにもかかわらず、児童の反応があまり良くないこともあります。しかも中学生や高校生とは違って、わからないことが一つでもあると児童たちの顔は引きつり、とても不安そうにします。児童の表情を見れば理解度がすぐにわかることが多いように思います。中学生や高校生はわからないことを隠そうとするので、表情にはあまり出さないことが多いと感じます。そして、その場ではわからなかったとしても後で友達に聞いたり、授業後に先生に聞きに行ったりします。しかし小学生はわかった時は「あー！そういうことか！」と声を出して自慢げに言おうとします。逆にわからなかった時は「え？どういうこと？」「なんかよくわからないなあ」と表情で訴えたり首を傾げたり近くの人と相談し始めたりします。中・高生のように後で解決するのではなく、その場で解決しようとしています。そのため、児童の理解度もすぐにわかるように思います。

児童たちは本当に元気よくリアクションしてくれます。低学年になるほどそれは顕著です。しかし、反応にすべて応えていては授業が進みません。しかし、中学校の場合は、生徒のつぶやきはとても大切だと考えます。小学生ほど反応しないからこそ、そのつぶやきは拾うべき場合の方が多いように思います。

私が目指す授業は、生徒のつぶやきがたくさんある授業です。「あー、なるほど！」と小学生のように思わず口にし、わからないことはそのままにせず、その場で解決する。こういう環境を作るのは教師の役目だと考えます。人の目を気にして小さくなるのではなく、なんでも言い合え、学び合える授業にしていきたいです。そして一つひとつの積み重ねが大きな力になると実感させられるよう工夫していきたいです。



発行日：2017年1月20日

発行所：神大ユース・サポート・プロジェクト(JYSP)

TEL：045-481-5661 (内線 4 3 5 2)

FAX：045-413-4154

E-mail：jysp-jimukyoku@kanagawa-u.ac.jp

白幡小土曜塾 青少年の居場所

目 次
白幡小土曜塾
私が白幡小土曜塾で頑張りたいこと 法律学科2010卒 沖野 勇介
児童の学習に取り組む姿勢と力を生かす 自治行政学科 4年 徳山 綾太
児童を、目の前にある課題に 集中させるための支援 人間科学科 3年 吉村 涼
児童生徒理解 英語英文学科 3年 原 亜由美
青少年の居場所
音楽の力 電気電子情報工学科 4年 岩崎 大樹
頑張っている生徒への言葉がけについて 英語英文学科 4年 長部 光将
変化と気付き 人間科学科 4年 榎本 航太
私ができること 英語英文学科 1年 新居 和真

私が白幡小土曜塾で頑張りたいこと

法律学科2010卒 沖野 勇介

私が白幡小学校にて、学校ボランティアとして白幡小土曜塾の「読み書き算」に参加して間もなく四年が経ちます。児童の学習支援を行います。児童は毎回持参した宿題、はまっこだリルといった課題を通して学習に取り組みます。学生を含めたボランティアは児童の分からないところを説明したり、質問に答えたりして学習を支援します。今年は「明るく、楽しく、児童と一緒に学び合い、成長し合える」を目標にボランティアに取り組みしました。

児童が明るく学習するためにはまず挨拶です。「おはよう」や「こんにちは」に始まり、「さようなら」に終わる。一日の始まりと終わりを一緒に児童と同じ時間を共に生活する以上挨拶は欠かせません。挨拶を通して児童の様子を知ることができます。「今日は元気ないね」または「今日はとても明るいね」といったことなども児童の言動からも知ることができます。このようなコミュニケーションを欠かさず児童はもちろんのこと、ボランティア同士においても忘れずに取り組む必要があります。なぜならば、ボランティアが一丸となって児童の学習支援に務めなければならないからです。そして、そのためには児童のことを知る必要があるからです。私たちが明るくしていれば児童も心の鍵を自然と開くと思います。絶えず、今後も私は児童一人一人に挨拶をしたり、声を掛けたりして児童とコミュニケーションを図っていきます。

私たちは児童と共に学び合っているのです。児童から学ぶこともたくさんあります。私たちの学びとは児童一人一人を知ることから始まります。知ることから、児童一人一人に合った学習支援が始まるのです。児童一人一人は色々な特徴を持っています。もちろん、算数が苦手な子もいれば好きな子もいる。絵が好きな子もいれば、本が好きな子もいる。それは個性です。その個性は児童一人一人がもっています。私たちは児童一人一人の

個性を認めることが大切です。児童たちがいて学校が成り立っているのです。私たちはそのことを忘れてはいけません。

最後に、私は児童たちが安心して学習するには大人たちの支えが必要だと思います。ボランティアは保護者、教師、学校や地域が一体となって活動を通して、児童たちを支えていく必要があります。それは形だけでなく、私たちがボランティアを通して取組むことに意義があります。取組みとしては、保護者、学校、地域とボランティアが情報を共有することです。白幡小土曜塾でもっとボランティア全体でしようほうを共有する時間をつくってもいいと思いました。その日の問題はその日に解決し、次の取組に活かせるようにしなければいけません。そして、私たちは児童の言葉に耳を傾けて行くことが大切ではないでしょうか。そのためには、私たちは児童と同じ目線に立つ必要があります。児童も大人も一人一人目線が違います。それは一人一人に映る世界が異なるからです。そのことを認め合うことが大切だと私は思います。絶えずその気持ちを忘れずに今後もボランティアに取組んでいきます。

児童の学習に取り組む姿勢と力を生かす

自治行政学科 4年 徳山 綾太

今期の活動では、児童の学習に取り組む姿勢と考える力の凄さを改めて実感しました。さらに、その姿勢と力を生かすために、声掛けの仕方や考えるための工夫をする大切さを実感する場でもありました。以下では、「なかよし英語」と「読み書き算」について、それぞれ述べていきたいと思います。

まず、「なかよし英語」についてです。今年から参加しているIさんという児童がいますが、今年1度も発音練習をしている場面を見たことがなく、話をするということもありませんでした。土曜塾の事務局長にIさんのことを尋ねたところ、個別支援級に通う児童だと分かりました。また、その際に、「英語自体が難しいからできないのかもしれない。また、話をするのがすべてではない。行動の中にIさんの気持ちが表れているから、行動を見るようにしましょう。」とアドバイスを頂きました。次の授業で、授業前や発音練習といった場面で関わり、行動を見るようにしました。絵を書くことが好きなようで、絵を描いている時は、とても楽しそうにしていました。その絵を一緒に見ながら、褒めたり反応したりするようにしていました。授業開始後、いくつか絵を描いたり自分の名前を書いたりして、それを指さしてくる場面がありました。それに対して反応しながら、先生の質問内容を英語と日本語で伝え、単語ではありましたが、すぐに発音して返してきました。初めて、発音を聞いた場面で、「そう。よく分かったね。」と伝え、嬉しそうにしていました。その後、会話文を発音する場面でも、「一緒に発音してみよう」と言うと、最後までしっかりと発音するこ

とができました。私自身とても嬉しかったです。Iさんとの関わりを通じ、児童について周りの人と相談して対応を考えることや児童と接し合える共通のものを見つけることが大事だと改めて実感しました。

次に、「読み書き算」についてです。今期から、低学年を担当することになりました。担当するにあたって、「児童が目標を具体化できる」ことを目標に取り組みました。「読み書き算」では、児童が本時の内容と目標、反省を書きます。目標の内容が「ふつうにやる」「(漢字を)キレイに書く」など抽象的な内容であることが多々ありました。そこで、具体化し、どんなことに気を付けるのか意識したり達成感を得たりできるようにしたいと考えました。

担当している児童に、Aさんがいます。漢字練習をすることが多く、「キレイに書く」という目標を設定していました。取り組む前に、「どうすれば奇麗に書けるかな。」と質問をすると近くの児童と一緒に考え、「書き順とバランスに気を付ける。」と答えました。また、漢字辞典の漢字を見て、「これに載っている漢字を目指す。」と言って取り組んでいました。終わった後、漢字を褒めて出来具合を尋ねると、「いつもより、奇麗に書けた」と喜んでいました。最近では、目標を「苦手な漢字の止め、撥ね、払いに気を付ける」と自分から具体化して書くようになりました。考える場面をつくることの大切さを改めて実感しました。

今期では、上述したように、児童の取り組む姿勢と力を生かせるようにすることの大切さを改めて学ぶことができました。それと同時に、苦手だと思われる児童やあまり積極的ではないと見える児童であっても、「必ずできる」と信じて関わっていくことが大切だと感じました。これから先、白幡小土曜塾で学んだことや考えたことを生かして、生徒が自立できる教師を目指していきます。



児童を、目の前にある課題に集中させるための支援 人間科学科 3年 吉村 涼

私は後期から横浜市立白幡小学校の土曜塾の活動に、ボランティアとして参加しています。後期からの参加ということや、元々月に2,3回しか開講しないということもあり、活動には多く参加できていません。しかし私は参加回数が少ないことをマイナスとして捉えるのではなく、児童との交流や講師や他のボランティアの方の行動を観察することを通して、目の前にある課題に興味・関心を児童に持たせる手段や方法を少しでも多く学ぶことを目標とし、活動をしました。そしてこの活動を通して成長できたこと、学べたことの2つの観点から、土曜塾の活動を振り返りたいと思います。

まず、成長できたことという点については、ある児童の意識を課題に向けさせることができたということです。この児童はあまり英語が好きではないらしく、英語の時間になると絵を描いたり友だちと話しをしてしまったりして、特に発音の練習に消極的でした。最初私はこの児童に対して、絵を描くことに対しての注意をあまり行うことができませんでした。しかし、その児童が絵を描いていることに気づいたときに話しかけたり、講師や他のボランティアの方の机間指導の様子を観察したりし、絵を描くところから英語の課題にどのように意識を向けさせるかを考えました。そして、その児童が小さい声でもきちんと発音練習しているときには、私自身がきちんとその様子を見て、必ず褒めるということを心掛けことにしました。この心掛けを続けることで、児童生徒の頑張りがや努力を見極め、それらを認める力を少し伸ばすことができたと感じました。

次に、学べたことという点については、授業のメリハリの重要さということです。あるとき、いつも騒がしくなってしまうクラスの時間に参加していたときのことでした。この日は全体的に児童に落ち着きがなく、普段以上に教室が騒がしくなっていました。講師は、いつもは全体や個人に注意の言葉かけをしています。しかし、このときは話すことを止め、教室が静かになるのを待っていました。このとき、はじめは講師が黙ったことに気づかなかった児童も、いつもとは違う空気を次第に感じとり静かになっていきました。私が参加した中で一番教室内が静かになり、児童自身がどうしなければいけないかに気づくことができた瞬間を見ることができました。授業内で児童が今やるべきことを自ら気づき、それを行うことを促すような工夫として、授業のメリハリのつけ方を学ぶことができました。

後期からの活動となり、回数的にはあまり参加することができなかったものの、土曜塾のボランティアとして多くのことを吸収することができました。また、児童は、私が思っている以上に周囲の環境や状況を把握しているという発見もありました。小学

校1～6年生まで、すべての学年の学習の支援をすることができ、様々な個性を持つ児童と関わり合うことができました。私は中学校の教員を目指していますが、この白幡小学校での経験は中学校でも役立つものであると思います。そしてこの経験を、経験だけで終わらすのではなく、現場で活かせるようにするためにこれからも日々学び続けていきたいです。

児童生徒理解

英語英文学科 3年 原 亜由美

読み書き算の自習支援の時に、時々小学校の先生も手伝いに来てくれることがある。その時に質問を受けた先生はその児童にわかりやすい説明を行い、児童もよく理解していた。児童の授業理解度を瞬時に判断し、その児童に適した指導方法で説明していた。そのためには、児童がどのように理解しているのかを把握した上で、どのような支援が適しているのかを判断する必要があると感じた。そして、先生方が必ず説明した後に行っていたのが、その問題に関連している違う問題を出して練習をすることだ。算数の計算式の数字を変えたり、漢字の書き取りではその漢字を使った違う熟語を例にあげるなど、説明をしっかりと理解し、アウトプットできるのかを確認していた。私は説明してそのままになってしまいうことが多かったが、きちんとアウトプットまで確認しないと、使えるようにならないと思った。

児童の要望としては「説明すること」だが、教員としては、その後のことも見据えた上で今後の児童の学習にも役立つように考えることが大切だと感じた。今後、まずは児童をきちんと理解した上で先を見据えて指導することを意識したいと思う。また、私は中学校の英語教員免許取得を目指している。将来中学校の英語教員になった際には、白幡小学校の先生のように生徒の理解度をしっかりと判断した上で支援したいと思う。



音楽の力

電気電子情報学科 4年 岩崎 大樹

私は音楽が好きです。音楽を始めたのは高校からで、その頃はよく友達と音楽スタジオに遊びに行っていました。皆初心者ですから演奏はもちろん下手です。それでも皆一緒に演奏をして、曲として成り立った時の感動は今でも忘れません。

青少年の居場所では、皆一生懸命演奏しています。皆で演奏する曲を決めて家で練習をしてきて、居場所の活動で合奏します。まだお互いの演奏に意見を言い合えるレベルにはなっていませんが、それでも確実にコミュニケーションの機会は増え、仲間の輪は広がっていると思います。上手下手が最重要ということでは決してありませんが、やはりある程度は演奏できた方が周りの楽器とコミュニケーションを取りやすく、自分も相手も楽しくなります。あくまでも本人たちで話し合い、上手くなっていくことが重要と考えていますが、私も自分と同じドラマーの子に練習のコツや演奏の仕方などを教えたりしています。未経験の子が初めてきた時にはスティックの持ち方やスローンの座り方など基本的な動作から一緒に行いました。自分の演奏できる楽器で他の楽器の子たちと合奏することもあります。

私は音楽に多くの影響を受けてきました。音楽は人生の武器だと思っています。この中で何人かは青少年の居場所を卒業しても音楽を続けると思っています。是非続けて欲しいと思います。私にも人生の居場所をくれた音楽ですから、きっとその子の生きる力にもなってくれば良いと願います。



頑張っている生徒への言葉がけについて

英語英文学科 4年 長部 光将

このレポートでは、「青少年の居場所バンド活動」での生徒たちの様子や活動を通して、私が学んだことについて述べたいと思います。

私がこの活動を通して学んだことは、生徒の励まし方です。たとえ上手くいかない箇所があり、それが気になるとしても、演奏をするのは生徒たち自身だから、私は諦めずに挑戦できるような言葉をかけるべきである、ということです。

普段活動を行っている場所で「地区センターまつり」があり、そこでの発表を間近に控えた活動日に、同じ箇所でリズムがとれずつまづいているドラム担当の生徒がいました。たしかに、そこは曲の中で一度静かになり、ほかに合わせられる楽器がないようなところでありましたが、だからこそしっかりと自分でテンポをキープしなければいけませんでした。

私は、本番が間近に迫るにも関わらず演奏がうまくいかないことにもどかしさを感じ、その子に「君のリズムがぶれてしまったら、後からほかの楽器が入ってこれないから、気を付けなさいよ」という旨を、語気を強めて言っていました。その子は「はい、そうですね」と言っていたましたが、その表情はやや曇ってしまいました。

その時、私は「しまった。」と思いました。そんなことは、演奏している生徒自身が一番よくわかっており、わざわざ言われるものではありません。しかも、それを強い言葉で言えば、生徒の演奏に対する意欲を削いでしまいます。彼らの演奏を見守る私がすべきなのは、完成度の高い演奏ができるよう、生徒たちを励ますことです。

その後の活動では、生徒が楽しく演奏するために、気になった箇所は鋭く指摘するのではなく、生徒自身がどうすれば演奏がよくなるか考えられる言葉がけをするよう心掛けています。

今後の活動においては、話をするときになるべくその子の名前を呼ぶようにするつもりです。というのも、最近新しく活動に加わった生徒がいて、私自身がその子を知り、その子にも私のことを知ってもらうことで、互いに打ち解けあおうと考えるからです。また、今後新しく入る生徒とこれまで活動していた生徒がお互いを知り、打ち解けた雰囲気で活動ができるよう、私は両者のパイプ役を担おうと思っています。次の演奏会は、「青少年の居場所バンド活動」にとって大きな舞台です。そこで、生徒が素晴らしい演奏を披露できるよう支えていきたいと思っています。

変化と気づき

人間科学科 4年 榎本 航太

今年の青少年の居場所のバンド活動は、多くの変化があった一年でした。7月のライブを最後に、今まで中心となって活動を引っ張っていた中学2年生の男子生徒7名が引退することになり、9月から新体制でのスタートを切りました。

新体制の下では、メンバーがどんどん入れ替わっていくことに戸惑いや不安がありました。受験勉強や部活が忙しくなり、活動に来る頻度が減った生徒が多くなりました。1回だけしか来なかった生徒もいて、自分の指導に至らない点があったのかと考え、今まで実践してきた指導法に自信が持てなくなったこともありました。しかし、難易度の高い楽曲に挑戦しては、毎回「絶対できないよ」と弱音を吐きつつも、結局ライブ本番には完璧に近い精度で曲を仕上げてくる生徒たちを見て、自分もこんなことで弱気になっている場合ではないと感じました。

一方で、新たに2名の大学生が活動に参加することになり、現在、青少年の居場所のバンド活動は4名の学生で取り組んでいます。1年半近く私は一人だけで活動していたので、同じ現場で楽しく活動できる仲間が増えたことは、とても嬉しいことでした。

また、以前は私一人だけで十数名の生徒を指導しなければいけないという状況でした。そのため必然的に生徒一人あたりに接する時間はごく限られたものでしたが、指導側の人数が増えたことで、生徒一人ひとりとコミュニケーションをとる時間が増え、今まで見るができなかった生徒の一面や、あまり話す機会のなかった生徒のことを理解するきっかけになりました。その結果、生徒の友人関係が把握できたり、性格や楽器の弾き方のクセなどを分析して一人ひとりに適した指導方法が分かってきたりと、すべてがプラスの方向に働きました。

青少年の居場所の活動に初めて参加した日から、約3年が経とうとしています。嬉しかったことも、悔しかったことも数えきれないほど経験しました。今までのバンド活動の中で嬉しかったことのひとつは、中学1年生のR君の変化です。

R君との出会いは2年半ほど前、まだ私がボランティアを始めて間もない頃のことでした。R君は当時小学5年生で、お母さんの後ろに隠れるようにして地区センターに入ってきたことがとても印象的でした。蚊の鳴くような声で自己紹介をしたR君は、緊張と不安のせいか能面のような顔をしていました。その日、私はR君にギターを教えることになりました。R君はギターを触ったことすらなかった初心者だったので、ギターの構え方、ピックの持ち方から教えました。ギターを弾くことの面白さを知っ

てほしかった私は、その日の活動のうちに、簡単なコードだけで弾ける曲を覚えてもらおうと思っていました。しかしR君はギターの基本ともいえる2本以上の弦を同時に弾くということがなかなかできませんでした。結局その日は、最後までコツをつかんでもらうことができず、2時間かけてギターの持ち方しか教えることができなかった自分が情けなく、せっかく勇気を振り絞って活動に来たR君に対して申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。何よりも気がかりだったことは、R君が次の活動に来るかということ。そして、活動中にR君が一度も私の目を見なかったことでした。後にR君のお兄さんから聞いた話ですが、R君はその日の活動で火が付き、家に帰ってから寝食を忘れてギターの練習をしていたそうです。私以上に悔しい思いをしていたのはR君だったのです。これは嬉しい誤算であったと同時に、活動に来る生徒に対して、私自身の責任感が圧倒的に欠如していたことを思い知らされた瞬間でした。

現在、R君は中学1年生です。声が小さく、お母さんの後ろに隠れていた少年は今、ギターボーカルとして青少年の居場所の活動を引っ張るバンドリーダーになりました。ギターのスキルは飛躍的に上達し、私が弾けないようなフレーズを涼しい顔で弾きこなします。私が「よく弾けるね」と言うと、R君は「こんなの簡単だよ」と私の目を見て得意気に言うのです。一重まぶたの切れ長の目。ふとした時に見せる不安そうな表情は、リーダーとしての重圧によるものだと思います。しかしその重圧を打ち消すのは、自分が中心になっていいバンドにすると確固たる信念に補強された覚悟と、積み重ねてきた膨大な練習量なのではないかと思います。ステージに立つR君の姿を見るたび、彼と出会った日のことを思い出します。

振り返ればこの3年間はあっという間の出来事だったように感じます。今になってようやく、週一回しかない月曜日の活動が、私や生徒にとってかけがえのない時間であるということに気づくことができました。青少年の居場所は、音楽やスポーツを通じて生徒とただ交流する場所ではありません。生徒たちの学校生活や友人関係、アイデンティティや彼らの未来にまで影響をおよぼす場所だと思います。その責任と意義を十分に理解し、残りわずかな活動に全力を注ぎます。

私ができること

英語英文学科 1年 新居 和真

私は昨年11月からこの「青少年の居場所」に参加しています。入った理由は、ボーカルとギターの経験が少しあったため、何か人のためになることはできないかと思ったからです。参加したのはまだ4回ほどであり、ライブにも参加できていませんが、練習時にボーカルとしてサポートに入ったり、練習の様子を見て問題点などをあげたりしています。私たちボランティアの学生ができることは生徒が自分たちだけで把握しきれないことを伝えることだと思っています。例えば、曲の演奏中ギターの音色が変であり、そのギターを弾いている生徒も変だと思いつつどこをどう直していいかと困っている時、どうすれば解決するのかを一緒に考えるようにしています。また、練習に参加する中で原曲をきちんと聞いていない生徒や、自分に自信がない生徒が見えてきて、ひとりひとりがどのように練習したらいいかを話すことができました。このようなことは、高校時代趣味でバンド活動をしていなかったらわからなかったことであり、この経験は人のために利用されることがわかりました。

私が一番子どもの成長を感じた瞬間は、私と同じ時期に入ってきたドラムパートの生徒が前の練習ではたたき方がぎこちなく、少し遠慮しながらたたいている面があったのに、次の週の練習では力強くたたけるようになっていたことです。家で練習してきたため自信をつけてきたのか、迷うことなくたたいている様子に私はすごいと思いました。また、この様子を見て、私は今後は生徒1人ひとりが個人練習して直すべき箇所を理解し、課題を持って帰れるような練習にしたいと思いました。

最初はどのように活動に参加していいかわからず不安であったのですが、とても優しく面白い先生方や、活動場所のあたたかい雰囲気になんか安心し、落ち着いて生徒の様子を見られるようになりました。これからもっと積極的に活動に参加し生徒とコミュニケーションをとることで生徒との信頼関係を深めたいと思っています。



発行日：2017年1月20日

発行所：神大ユース・サポート・プロジェクト（JYSP）

TEL：045-481-5661（内線4352）

FAX：045-413-4154

E-mail：jysp-jimukyoku@kanagawa-u.ac.jp

